

1. 事業の概要

(1)国際開発研究会

国際開発研究会は、開発途上国の現状について強い関心を持ち、「開発とは何なのか、そして、これまでの開発はどのような考え方・理論に基づき、また、どのような手法で行われてきたのか」といったこと大学の講義を受けたり勉強会を行ったりしていた新潟大学の学生が中心となって2006年11月に発足しました。現在は新潟大学という枠組みにとらわれず、他県の大学生や大学院生、若手教員、開発途上国に关心を持つ社会人が参加する会となっています。

学生を中心としたメンバーが知識・心構えの土台を固めたうえで、実際に開発途上国を訪問して現地の方々にお会いし、話して、自分の生き方・考え方方に磨きをかけ、「百聞プラス一見」の力を得て、社会においてそれぞれの立場で、国際協力に関わっていくことを目指しています。

(2)事業の目的

開発途上国の事例として、「アフリカに一番近いアジアの国」とされるマダガスカルの社会、自然、文化、若者の意識や暮らしについて学び、交流し、その結果を日本の若者に発信することを目的として、この事業を計画しました。

具体的には、マダガスカルの開発や社会に関する事前の勉強の後、同国を訪問して「開発途上国」の事例としてのマダガスカルの開発や社会の事実から学ぶとともに、現地の若者やそのほかの方々の意見を伺う等して、相互の理解を深め、また、同じ人類の一員としての一体感を強めるということを目指しました。

その結果は、学生向け及び市民向けの報告会を行うとともに、インターネット等で発信して、他の若者等と広く共有できるようにすることとしました。

(3)マダガスカル選定の理由

私たちの親の時代に比べ、円が3倍ほどに強くなった一方で、国際航空運賃が格段に安くなったため、私たちも海外に容易に行けるようになりました。しかし、その行き先は、先進国とアジアの国々が中心であり、特に開発途上国に関しては、人類社会の共有意識の下に、これまでのアジアの人たちとの相互理解・交流の基礎を拡大させる形で、より幅広い理解・交流を目指す必要があると考えています。

その点、マダガスカルは、地理的・経済的・政治的にはアフリカであるものの、インドネシアから移動していった人たちが初めて居住して社会の基層を作り、「アフリカに一番近いアジアの国」(山口洋一・元駐マダガスカル日本大使の著書の副題)と言われるように、大変アジア的な国です。2004年に映画「マダガスカル」が広く上映されたことにより、関心を持つ日本人が、特に若者の間では多くなっています。そして、それに先立って、メンバーの多くが暮らす(但し、他県で生まれ育った者が多数になっています。)新潟においては、ジョスラン・ラディフェラ駐日マダガスカル大使の御尽力もあり、2004年以来、同大使をお招きしてのシンポジウム、その機会に設立された市民レベルの新潟マダガスカル友の会による活動、2006年秋の同大使による県立中等教育学校での国際理解授業の実施と新潟大学での公開の特別講義、マダガスカル在住の女性を招いての同年春の新潟青稜大学でのマダガスカル講演会等が行われています。

また、人類社会の共有意識を得る上では、比較的遠い場所であることに加え、開発途上国の開発問題について強い関心を持っている者のグループとしては、開発が遅れているとされる国の人々の状況を見ることが、とりわけ重要です。その点、マダガスカルは、世界銀行の2007年の報告では、「1日1ドル以下で生活」する人の割合が6割を超え、そのようなデータのある国の中では下から5番目の「貧困国」とされています。しかし、平均寿命、識字率、就学率、1人当たりGDPを用いてその国の人々が自分たちの生活を良くする力を総合的に示した国連開発計画の「人間開発指数」に関しては、2007年の報告において、マダガスカルは、下位ではなく、中位グループの中の下位の開発途上国になっています。そのように、お金で見ると最貧国、しかし、自分たちの生活を良くする力は比較的大きい国の実態を見ることで、より多くのことを学べると考

えました。(実際、その通りだったのです。)

以上のような認識と状況から、私たちは、開発途上国の事例として、「アフリカに一番近いアジアの国」とされるマダガスカルの社会、自然、文化、若者の意識や暮らしについて学び、交流し、その結果を日本の若者に発信したいと考えたものです。

なお、実施に当たっては、上記のような駐日マダガスカル大使他の方々の御協力のお申し出も頂いていました。これは、的確に訪問先や交流相手を選定して効果的な訪問を実現する上で、非常に重要なことでした。また、事故等の万が一の場合にも、現地に協力者があることは、非常に心強いことです。更に、マダガスカルを訪問する日本人が限られているため、現地の日本大使館、JICA、元日本留学生他の日本に縁のある方々等との連絡も密接にできるということも強みです。

巻末資料

資料1 「開発」とは何か

資料2 マダガスカルという国

2. 事前の勉強会

各自がマダガスカル等について研究するとともに、13回ほど集まって、勉強会及び現地の学生との交流会のプレゼンテーションの作成等を行いました。

そのうち1回の7月16日は、2006年末まで2年間、青年海外協力隊員として国立ツインバザザ動物公園を拠点にマダガスカルの生態調査をされ、現在は仙台市八木山動物公園で、同動物公園とツインバザザ動物公園との姉妹提携を担当されている田中ちひろさんに来て頂きました。但し、貴重な機会であるので、広く一般に解放し、「新潟大学「平和学」副専攻科目「国際開発協力演習(環境と開発)」一般開放講義+国際開発研究会「アジアの国マダガスカル訪問・交流事業」(三菱銀行国際財団助成事業)勉強会 田中ちひろさん講演マダガスカルの社会、自然、暮らし 青年海外協力隊活動の体験から」として開催しました。実際、この会には、学生、市民、新潟県青年海外協力会会长の藤田純子さんを中心とする元青年海外協力隊員の方々、新潟大学の教員・事務職員等が参加しました。

そのほか、マダガスカルの教育の制度と実態、社会の習慣等について、マダガスカル在住の浦田あゆみさんの一時帰国の機会に時間をとって頂いて、東京在住の参加者が話を伺うこと等もしました。

巻末資料

資料3 田中さん講演会

3. マダガスカル訪問・交流

(1)訪問箇所

マダガスカルの国土面積は、日本の国土の1.6倍もあります。また、道路が未整備であるために長距離移動には飛行機を選択せざるを得ないものの、運賃が高い上、時間も不正確という課題があります。加えて、首都を含む中央高地以外ではマラリア等のリスクが高いことも課題です。そのため、訪問先は、首都近辺の中央高地の中から選定しました。

具体的な訪問先の選定は、ジョスラン・ラディフェラ駐日マダガスカル大使(2007年11月に駐米大使に御就任。)(政府機関訪問等を御紹介下さいました。)、国際協力機構(JICA)(ODAや開発問題についての説明、青年海外協力隊員訪問)、国連開発計画(UNDP)マダガスカル事務所(プロジェクトやNGOの訪問)、新潟マダガスカル友の会(マダガスカル・ガールズカウト連盟の紹介)、マダガスカル・ガールズカウト連盟(現地の学生との意見交換会)等の御協力の下に行いました。

具体的な訪問先は、次の日程表に示した通りです。

(2)訪問日程

マダガスカル訪問の日程は、学生及び大学教員である参加者の都合、航空運賃の季節変動、現地の気象条件及び週に2便だけのバンコク・アンタナナリボ間のマダガスカル航空の運行状況から、9月7日(金)から21日(金)までとなりました。なお、当初は20日(木)帰国の予定であったものが、バンコク・成田間の便の混雑のために、帰国を1日遅らせたものです。しかし、その結果、世界遺産の古都アユタヤを訪問することができ、その結果、タイの歴史、世界遺産、森林伐採禁止を受けて観光用に転用された象を通じてタイの森林問題等を学ぶ重要な機会となりました。

マダガスカル訪問日程: 2007年9月7-21日

日(9月)	行動
7(金)	15:00 成田空港集合 18:30 成田発 ユナイテッド航空 UA837 23:10 バンコク着
8(土)	01:10 バンコク発のマダガスカル航空 MD11便で 07:55 アンタナナリボ着の予定であったが、機体に問題が生じたためにマルセイユまで行って修理してくるとして、空港内のホテルに全員シングルの部屋が与えられた。 18時間近く遅れて MD11 は漸く出発し、深夜にマダガスカルに到着。ホテルに依頼して予約し、時刻変更もしておいたワゴン車でホテル・サカマンガへ。
9(日)	遅い朝食の後、8日(土)に予定していた飲料水等の必需品の買い物を、日曜日には13時で閉まるスーパー・マーケットでまず行う。この日午後にはソインバザザ動物園を訪問の予定であったが、町に慣れることを優先して1週間後に延期し、午後は市内散策。休日は休みの市場の外で果物等を売る人が多かったので、そこも訪問。
	アンドゥリアマンジャトウ元郵政・通信大臣御夫妻御招待により同邸で夕食を頂く。大臣とその父君(元国会議長)のピアノ演奏、夫のピアノに合わせての夫人の歌等、大歓待を受ける。
10(月)	08:30 日本大使館に河上書記官を訪ね、安全対策等について助言を頂く。その後、新潟大学出身の宮村医務官に面会の予定であったが、御不幸のため急遽帰国され、面会は取りやめ。齋藤は、アンドゥリアマンジャトウ夫人及び同夫人の知人の医師の案内で市内の公立病院を訪問。
	14:00-15:00 JICA 事務所で、外川所長他から、日本の援助やマダガスカルの開発課題についてお聞きする。齋藤は、更に、保健・医療協力の担当者からお聞きする。
11(火)	11:00-12:30、自然林保護や農民の生活向上のための事業を行う NGO の FANAMBY 訪問。ラジャウベリーナ専務理事から、従来の活動を拡大し、伝統米(赤米)とバニラのフェア・トレードを始めたこと等についてお聞きする。 齋藤は、サン・フランソワ診療所・産院を訪問。
	14:00-16:00 アンタナナリボ大学訪問。一橋大学博士課程修了の Lalaina Razafiarison 教授を訪ねると、構内を案内して下さるとともに、京都大学で鳥類学を研究して学位を取得した教授、明治大学で経済学の学位を取得した教授、唯一の日本人学生等を紹介して下さった。
	17:00 仕事に厳しい大統領の下、超多忙の中、時間をとて下さったイヴ・ラザフィマヘファ大統領府国家開発計画事務総長を訪問。このように日本から学生たちがマダガスカルを訪問することの意義を高く評価する言葉等、暖かい歓迎を受ける。
12(水)	10:00 環境省管理下の特殊法人として国立公園他自然保護区の管理を行っているマダガスカル自然保護区管理協会(ANGAP)を訪問。面会予定の管理部長は急に南アフリカに出張となつたが、Mme Sahondra Tiana ANDRIAMANGA 情報システム課長他から、国立公園管理システム等について伺う。 齋藤は、マハジャンガの JICA 母子保健プロジェクトを訪問。
	14:00-17:30 アンタナナリボ大学学生他との交換会。日本側からは、食料自給率の低下、都市問題、自然環境等、日本が直面する諸課題についてパワーポイントを使って報告。(環境庁会議室)

13(木)	アンジュズルベの先にある UNDP 担当の地球環境ファシリティー・プロジェクトを FANAMBY が実施している残存自然林保護と隣接農家の収入向上のプロジェクトプロジェクトを訪問。 齋藤は、アンツィラベのアヴェ・マリア病院・産院を訪問。
14(金)	08:00-15:00 アンブヒチャンガヌ小学校に派遣されている青年海外協力隊員長塚未来さんを 訪問。帰路、小学校の管理費を得るための野菜を売りに首都に出る長塚さん同乗。 夕刻、アンダシベ・マンタディア国立公園に隣接する宿 Buffet de la Gare に移動。森林に 隣接するこの宿は湿気が多く、翌朝、一部の参加者の体には、ダニと思われる虫さされの 跡が見られた。
15(土)	施設やガイド等の管理システムがよく整備され、来訪者も多く、50%が地域の小規模開発に 回される入園料収入、また外貨を稼いでいるアンダシベ・マンタディア国立公園(主にイ ンドリ保護区)を訪問。人力車が多い等の特徴のある地方都市の例でもあるムラマンガの 町に立ち寄った後、アンタナナリボに戻る。
16(日)	首都付近の青年海外協力隊員 3 名、首都にとどまっていた長塚隊員、歯の治療に来ていた 地方の村の隊員 1 名とホテル・サカマンガ中庭のビュッフェ昼食をとりながら意見交換。 午後、ツインバザザ動物公園を訪問して、市民の日曜日の過ごし方等を見る。
17(月)	07:45 アンタナナリボ発 MD10 22:20 バンコク着 ホテルへの往復のために予約しておいたワゴン車が見当たらないため、その場で別会社に往 復を予約して利用。Hotel Ibis Siam 泊。
18(火)	10:30-12:00FAO アジア・太平洋地域事務所訪問。小沼次長他が説明して下さる。内容は、 FAO の活動に加え、国際機関で働くための条件、現場経験の重要性等も。 午後、チャオプラヤ川の定期船に乗って町の成り立ち等を学ぶ予定であったが、軍のお祭り の演習のために川が閉鎖され、運休のため、近くのタマサート大学を訪問。帰路、ホテル 方向の深刻な渋滞のため、タクシーが次々と乗車拒否。乗せてもらえた 1 台に乗れなかつた者は、結局苦労してバスを乗り継いでホテルに戻る。 夕食は宮田顧問の知人のタイ人とタイ料理。
19(水)	午前、国連環境計画アジア・太平洋地域事務所訪問。日本の環境省から派遣の西宮次長が、 活動等について説明して下さる。また、カフェテリアでの昼食の後、国連ビル内を見学。 スコールがやむのを待った後、チャオプラヤ川に行き、上流のノンタブリまで定期船で往 復して、町の成り立ち等を学ぶ。 夕食は、宮田顧問の知人の別のタイ人とタイスキヤキ(しゃぶしゃぶ)。
20(木)	第 2 代タイ王朝の首都だった世界遺産アユタヤを見学。(当初計画にはなかったが、飛行機 の混雑により帰国を 1 日遅らせたために実現。しかし、タイを学ぶ上で大変有意義であつた。) 夕食は UNEP 西宮次長と、タイ人経営の和食レストランで。
21(金)	04:15 予約しておいたワゴン車で空港へ 06:50 バンコク発 UA838 15:00 成田着、入国・税関手続き後解散

巻末資料

- 資料 4 マダガスカル訪問行程図
- 資料 5 マダガスカル訪問地図
- 資料 6 訪問写真

4. 訪問・交流の成果

今回マダガスカルを訪問し、交流したことで、私たちは非常に多くのものを得ました。そのこ とで、更には、下記報告会やインターネットによる発信以外の個人的その他の関係を通じて、色々 な人に成果を広めることができつつあると考えています。

しかし、参加者それぞれの専門が大きく異なるので、各参加者にとっての成果も異なります。 そこで、各参加者自身にとって最も大きな成果であったと考えるところを以下に記します。

高橋拓也

私がマダガスカルを訪問して得たことの一つは、思い描いていた貧困国の負のイメージや統計数値と、現実との間のギャップを認識することが出来たことです。もちろん、イメージと合致する社会も存在するかもしれません、貧困国の全てがそうだというわけではないのです。

「開発」というと、途上国の人たちに、先進国の人々が救いの手を差し伸べるといったような、強者が弱者を救うようなイメージを先進国の人々は持ってしまいがちです。そもそも、「先を進んでいる国」という意味を持つ「先進国」という呼び名に違和感を持つべきなのかもしれません。実際の開発は、そのようなものではなく、「問題を解決するためには何をするべきか、同じ視線で議論をして、決定していくこと」だと、今回マダガスカルを訪問し、交流してみて実感しました。

また、マダガスカルの人たちに会う以前の私は、貧困という悪を憎む義憤といいますか、弱きを助ける正義心といいますか、そういった心情をモチベーションの原動力として開発に関わろうとしていたように思えます。マダガスカルの人たちに会って、一緒にご飯を食べ、意見を交換し合って、気づいたら以前のような考えは無くなってしまいました。今はただ、単純にその恩返しがしたいのです。

現地を訪れ、「開発というものは肩肘張って関わるものではなく、一緒に何かを楽しんで行いたい」という気持ち、あるいは恩返しのように、もっと明快でポジティブな動機で関わってよいものなのだ」という考えが私の中に生まれました。このような、精神面での大きな成長が、私にとって一番の収穫です。私は今後、何かしらの形で途上国の問題に関わっていくと思いますが、マダガスカルを見て、聞いて、感じたことを、日々活かしていきたいです。

高橋寿明

アンタナナリボ大学の学生と交流する機会がありました。そこでは、私たちが日本の文化、社会、自然、歴史などについて写真を使用しながら紹介しました。その発表に対して、学生の方々から英語で質問がありました。私たちは、その質問に対して、四苦八苦しながら英語で対応しました。彼らはマダガスカル語、フランス語、英語を話し、さらに日本語を勉強しているとのことでした。交流会終了後、十数名の学生が私たちのメールアドレスを聞きに来てくれました。その時に、アドレス交換をした学生とは、半年過ぎた今でもメール交換をしています。彼らの学業への意欲に対して、私も学ぶことへ奮起されています。

また、今回の訪問では、開発問題に携わっている団体を訪問し、現地での開発の実態に触ることができました。開発の問題は、現地の自然状況、文化、歴史、社会状況に根付いていることがわかりました。各種団体の開発問題への取り組みの話を聞くことによって、現地の歴史や文化、社会状況などに触ることができました。開発の主人公は、現地の人々であるため、開発を良きものとするためには、彼らの背景を理解することが不可欠となります。

今回の訪問で出会った JICA の青年海外協力隊員の方が「最初私もマダガスカル人になろうと思った。でも、彼らはマダガスカル人で、私は日本人であることは変わらない。私は日本人で、私に出来ることをしよう。」と言っていたことが、私の心に残っています。

坂牧光恵

私がマダガスカル訪問で学んだことは、彼らの国の文化・風土・自然・生活様式そのものです。日本の生活や地図の上の勉強では得ることのできない新たな発想を私にもたらしてくれました。例えば訪問したマダガスカル政府関係者の方のお話や現地の NGO、大学の先生や学生、それぞれの立場から具体的に自国について、関心事について考えを聞けたことは、大変大きな成果になりました。私が日頃考えている「農業」「開発」「援助」「貧困」「政治」「人種」「人間性」などに対する意見と現場での意見とを比較することができ、初めて自分の考えを取捨選択できたからです。

そして、現地の青年海外協力隊員訪問でも感じたことですが、現実に日本にあるような物や十

分な現金がない中でも、今できる具体策をやってみることの重要性を感じました。情報が行き渡り、グローバリゼーションという地球の縮小化で世界は満たされていると思っていた。物事も、日本のように回りくどく、動いていくまでに時間を要するものだと思っていました。しかし、自分の行動は何も介さない。語弊のある言い方かもしれません、頭でなく、口ではなく、体ができる、行動できるのが人間だと、改めて気付かされました。

今でも、何かを判断する時、現地の人々の笑顔を思い出しています。一見貧しい、原始的などと言われるような彼らの生活、土と植物の葉で作った家、川での洗濯、古いタクシー、舗装されていない道路、どこでもやはり彼らの笑顔は輝いていました。“当たり前”のことの違いは、私の生活に大きな影響を与えています。彼らの生活こそ効率的だと私は感じたからです。洗濯板での洗濯、ろうそくの利用、携帯電話を持たないこと、日本では必須だと感じることを見直したら、本当に心身ともに楽になりました。

今後も彼らの生活を学ぶべく、交流を続けていきたいと思います。

武内貴之

今回のマダガスカルのスタディーツアーを通じて得たことは大きく分けて二つあります。

一つ目は、マダガスカルの教育制度について実際の現場を訪問して、その様子をリアルに感じることができたことです。

マダガスカル訪問の前に、現地の学校建設のプロジェクトに携わっていた方から、マダガスカルの教育制度の概要についてお話を聞く機会を設けていただきましたが、それに加えて現地のアンブヒチャンガヌにある小学校を訪問することで、具体的にどのような教育活動がなされているか知ることができました。

JOCV(青年海外協力隊)の隊員が派遣されている学校は、備品などが不足しているという課題を抱えつつも、村の人々と隊員の方が協力して作った野菜を売った資金を基に、外部の資金に依存しすぎない教育活動がなされていました。

同時に隊員の方は備品の充実していない学校で、アイデア勝負で教育活動に取り組んでいることが分かりました。マダガスカルの伝統的なスポーツの普及活動など、現地にあるものを最大限に利用した取り組みから、地域に見合った教育活動がなされている様子を感じ取れました。

二つ目は、現地の様子をビデオカメラで記録して、編集した動画をインターネット上で配信して、マダガスカルの様子を伝えることができたことです。

インターネットや事前学習の資料などでマダガスカルがどのような国なのか、事前に学びましたが、現地の雰囲気は十分にはつかむことはできませんでした。そのため、私は体験したマダガスカルのリアルな様子を伝えるために、訪問中は現地の人たちの許可をもらいながら、出来る限り撮影をしました。

バナナ市場では、なかなか言葉が通じず戸惑いましたが、現地の人たちの温かい対応を感じました。また、現地の大学生との交流会では、私たちが日本の紹介をすると、それに対してたくさんの質問を受けました。彼らが日本語やアニメに興味を持っていることから、日本にとってマダガスカルは決して遠い国ではないと実感しました。

動画を見ててくれた人たちからも、さまざまな意見をもらえて参考になりました。私の動画からマダガスカルの様子を感じ取ってもらえたことは嬉しいことです。これからも、動画を少しでも多くの方に見てもらい、マダガスカルのリアルな様子を伝えていけるように取り組みたいと思います。

斎藤君枝

平成 19 年 9 月にマダガスカルを訪れ、主に医療保健の現状や JICA が行っている国際協力支援活動を見せて頂きました。マダガスカルでは、栄養状態が不足し、不衛生な環境の中で暮らしをしている人々が多く、マラリア感染や呼吸器感染症、下痢などで亡くなる割合が高くなっています。2006 年人口白書によると、マダガスカル国民の平均寿命は 56 歳で、日本の男性 79 歳、女性 86 歳と比べると大変短く、妊娠中や出産で亡くなる母親の割合を見ると、マダガスカルでは 10 万人中 550 人に対し日本では 10 人、5 歳未満の子供が亡くなる割合はマダガスカルでは 1000

人中 118 人に対し日本では 4 人と大きく異なっています。また、一人の女性が産む子供の数はマダガスカルでは平均 5.04 人、日本では 1.25 人です。マダガスカルでは多くの子どもが産まれても亡くなる割合が高く、人々がより健康で長く暮らすには、生活環境を整えたり、栄養を改善したり、医療サービスを充実させたりといった政策と国際協力支援が必要です。

JICA では、母と子の健康支援を目指す母子保健の改善プロジェクトやエイズを予防する感染症対策プログラムを実施していました。活動の主体となる専門家や海外青年協力隊の方たちは、マダガスカル人と現地語でコミュニケーションを交わしながら地方で生活し、文化に溶け込み、直接母親や子どもに対する医療サービスを行ったり、医療システムについて検討したり、医療専門職の育成に関わっていました。人や物資が不足していても、マダガスカルの住民や専門職の人たちに健康に関する正しい知識や医療保健の技術を伝えることで生活を少しづつ変化させていくことができます。マダガスカルはおだやかで働き者の方が多く、調和を大切にする風土がありました。JICA の支援はマダガスカルの人々の努力とともに、時間をかけて成果を上げていくのではないかと感じました。

この度、研修を支援してくださった三菱銀行国際財団の関係者の方々には心よりお礼申し上げます。

5. 報告会

(1)学生向け報告会

10月 28 日(日) 13:00-17:30、新潟大学総合教育研究棟「地域・国際交流室」で学生向けの報告会を、夏休みにインドネシアを訪問した農学部の学生たち及びキューバを訪問した同学部の学生と合同で行いました。その際、8 月に御夫婦でマダガスカルを訪問されたナチュラリストの藤田久さん(元高校生物学教諭)も、マダガスカルの紹介のパワーポイントを見せて下さいました。

(2)市民向け報告会

12月 16 日(日) 13:30-16:00、新潟市内の「クロスバルにいがた」で、市民向け報告会「大学生の見た開発途上国 in マダガスカル 現地の写真と映像から」を実施しました。

なお、広報には、公民館等の市の施設にチラシを置いたりポスターを貼ったりしたほか、開発途上国に关心を持っている人たちのために週に 1 回東京で発行され、全国に配信されているメールマガジン「Developing World」の行事案内にも掲載して頂きました。

(3)報告会での報告内容

学生向け報告会、市民向け報告会においても、ほぼ同じ報告手段を使いました。つまり、宮田顧問から全体の日程、訪問先等を紹介した後、各参加者から、パワーポイントで、強く印象に残ったこと等を説明しました。但し、武内は、首都アンタナナリボの市場で値切りながらバナナを買ったこと、「青少年活動」のために村の小学校に派遣されている青年海外協力隊員を訪問した時のこと及びマダガスカルの学生たちとの交流会を行ったことを取り上げてビデオを作成し、上映しました。この報告書の末尾の資料編に、各自のパワーポイントの内容及び武内のビデオのキャプチャー画面を掲載します。但し、宮田顧問のパワーポイントは、同じ資料編の訪問写真と重複するものが多いため、掲載を省略します。

それぞれの報告テーマは、報告順に次のとおりです。

宮田春夫(顧問)	マダガスカル訪問概要
坂牧光恵	私の会った Malagasy (マダガスカル人)
高橋寿明	マダガスカルで見たもの
高橋拓也	ビジネスは貧困問題を解決できるか
齋藤君枝	マダガスカルの医療から見えた人々の暮らし
武内貴之	スタディーツアー イン マダガスカル (ビデオ)

巻末資料

資料 7 報告会(ポスター、報告資料)

6. 報告会以外の情報発信

(1)インターネットによる発信

次のところに会のウェブサイトを設け、今回の訪問・交流とその成果を紹介し、若者等が「開発」とは何かについて考えられるようにしました。

<http://kokusaikaihatsuken.net/>

また、訪問・交流の様子を基に作成したビデオ「スタディーツアー イン マダガスカル」を作成しました。その内容は、首都アンタナナリボの市場で、マダガスカル語を使って値切り交渉をしながらバナナを買った時の状況、村に青年海外協力隊員を訪ねた時に体験したこと及びマダガスカルの学生たちとの交流会を開いた時の様子を編集したものです。首都の活気やマダガスカル人の生活、村の青年海外協力隊員や村の人々の生活や明るさ、マダガスカルの学生たちの活気等について表現しました。

その解像度を落したものは、ユーチューブ(<http://jp.youtoube.com/>)に掲載し、その際、日本語だけではなく英語でもキーワードを入れて、世界中の人々が見られるようにしました。日本語では、「マダガスカル」及び「開発」をキーワードとして検索すれば、このビデオだけが現れます(2008年2月初め現在)。

なお、他の場面も少しづつ編集して掲載して行きたいと考えています。

また、宮田顧問からの JICAへの報告を JICA ウェブサイトに掲載して頂きました。そのアドレスは次の通りです。

http://www.jica.go.jp/hiroba/topics/2007/071017_02.html

巻末資料

資料 8 国際開発研究会ウェブサイト

資料 9 JICA ウェブサイトでの報告

(2)リーフレット作成・配布

開発途上国の現場を見ることが重要性についての理解を広めることの重要性を強く認識したため、自分たちの体験を基に、開発途上国の実際を見てみようという内容のリーフレットを 1,000 枚作成し、下記 JICA タウンミーティング等の行事の際に配布するとともに、公共施設等にも配布しました。今後、大学・学校での配布等を行う予定です。

巻末資料

資料 10 リーフレット

(3)JICA タウンミーティングへの出展

2月23日(土)にながおか市民センターで開かれた JICA の「にいがた国際協力タウンミーティング」の際に設置された「国際協力・交流団体地球村」に出展し、マダガスカル訪問の事例を示して、市民や若者に「開発」とは何かを考えもらう機会にしました。なお、展示を行った団体は、全部で 11 団体でした。

この出展には、資料・ポスターの提供等により駐日マダガスカル大使館及びマダガスカル航空も御協力下さいました。

巻末資料

資料 11 JICA タウンミーティング展示概要

(4)その他

新潟県内で最も広く読まれている新潟日報に、この訪問・交流の結果を基に、「開発」と何かを論じた投稿を代表の高橋拓也が行いました。

巻末資料

資料 12 新潟日報の記事

巻末資料

	ページ
資料 1 開発とは何か	13
資料 2 マダガスカルという国	16
資料 3 田中さん講演会	18
資料 4 マダガスカル訪問行程図	19
資料 5 マダガスカル訪問地図	20
資料 6 訪問・交流写真	21
資料 7 報告会	36
資料 8 國際開発研究会ウェブサイト	41
資料 9 JICA ウェブサイトでの報告	42
資料 10 リーフレット	44
資料 11 JICA タウンミーティングでの展示概要	45
資料 12 新潟日報の記事	46

資料1 開発とは何か

第二次世界大戦後、植民地が独立して「開発途上国」が世界の国の大半を占めるようになって以降、「開発」についての考え方方が展開してきました。

1960年頃までの考え方は次のようなものでした。

- ・開発途上国はかつての先進国たどった道を進む。
- ・工業化が「開発」である。
- ・1人当たり GNP を増やすことが「開発」である。
- ・一部の人たちが豊かになれば、そのお金が流れて、他の人たちも豊かになる。
- ・当時の「開発途上国」の大半を占めていたラテンアメリカを想定した考え方

しかし、多くの実証研究が行われた結果、1960年代後半になると、開発途上国の多くで経済成長したのに、豊かな人が更に豊かになっただけで、貧しい人は貧しいままであること等が明らかになりました。その結果、1960年代終わりから、その反省に立った次のような考え方が出てきました。

- ・開発途上国はかつての先進国と同じ過程をたどるのが最善である訳ではない。
- ・農村・農業も重要である。
- ・貧富の差の緩和、農地解放等が重要である。
- ・雇用、basic human needs(栄養、保健、住まい、基礎教育等)の充足が重要である。

しかし、1980年代になると日本を除く先進国は景気後退に悩み、援助に消極的になり、援助を供与する場合も、国家開発計画の策定、経済の自由化等、色々な条件もつけるようになりました。

1990年代になると、東西対立を利用して先進国との要求を多少なりともかわしていた開発途上国も、援助の見返りとして、経済、貿易、先進国からの投資の自由化等、米国、西欧諸国等の主張する政策条件を受け入れざるを得なくなりました。しかし、他方で、アマルティア・センや国連開発計画(UNDP)の人間開発指数(Human Development Index)など、貧富の差、basic human needs、雇用、working poor 対応の考え方の展開も見られました。

そこで注目されるのは、インド国籍でハーバード大学教授のアマルティア・センの考え方です。彼は、これまでの考え方を統合しつつ「開発」とは何かについて、次のように明らかにしています(ノーベル経済学賞を受賞)。これは、特にマダガスカルのような後発開発途上国にはよく当てはまると思われます。

自由の拡大は開発の目的であると同時に、開発の手段でもある。

ここで言う自由とは、経済、食糧・栄養、健康、衣服、住まい、安全な飲み水、衛生などの個人に関わるもの、疾病対策、保健・医療制度、教育、雇用、平和・秩序維持、政治的・市民的権利、コミュニティの活動への参加等の社会制度に関わるもの等と、非常に幅広いものです。

そのような「開発」において、個人が自分たちの生活を良くする力が根幹を成す。「貧困」とは、そのような力が奪われた状態である。

ここで言う「個人が自分たちの生活を良くする力」とは、食糧、栄養状態、健康、衛生、住まい、読み書きなどの教育、自由に情報を得られること、みんなで自由に議論して新しい共通の価値観を形成できること等、非常に幅広いものを含みます。かつ、個人は、援助等の受動体ではなく、生活を良くする主体だとしています。

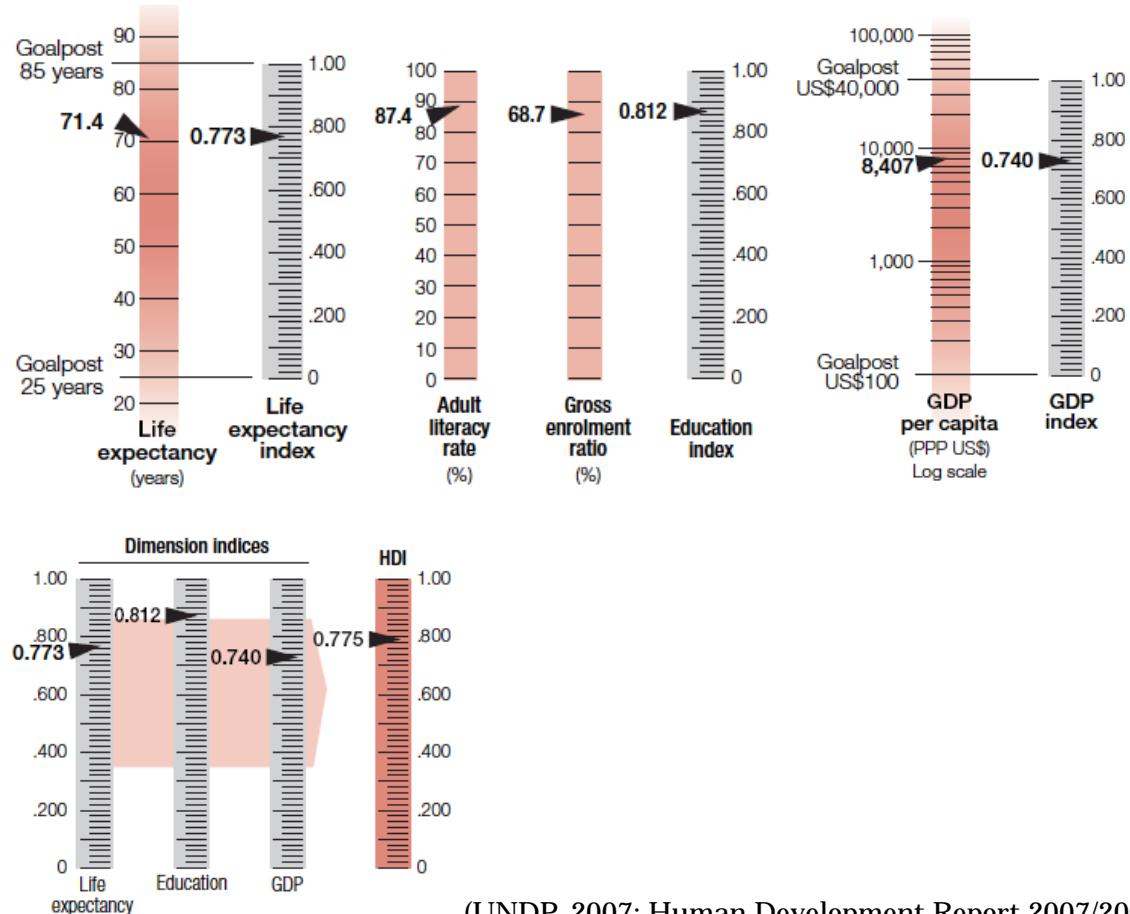
1990年以後毎年発行されて来た(資金不足のため2007年からは1年おきになるようです。)「人間開発報告書(Human Development Report)」において、国別の人間開発指数(Human Development Index)の数値が示されています。この指数は、アマルティア・センの考え方沿って、個人が自分たちの生活を良くする力を示そうとしています。

しかし、そのような力が特に重要な後発開発途上国では、統計自体があまりないため、そのよ

うな国が多くても統計のある出生時平均余命(平均寿命)、識字率、就学率、1人当たりGDPだけを使い、最低値を0、目標値を1として、その間のどこにあるかを示しています。平均寿命については、最低値を25歳、目標値を85歳としています。識字率と就学率に関しては、0%が最低値、100%が目標値です。1人当たりGDPに関しては、最低値を100ドル、目標値を4万ドルとしています。

そのうち、識字率と就学率については、2:1の割合の重み付けをした上で教育指数としてまとめます。就学自体よりは実際に読み書きできることのほうが重要だからと考えられます。また、1人当たりGDPについては、金額が小さいうちはわずかな伸びが大きな効果を生じ、金額が大きくなると、同じ額の伸びの効果が小さくなるとの考え方から、対数値で示しています。

「人間開発指数」は、以上の指標の平均値です。



(UNDP, 2007: Human Development Report 2007/2008)

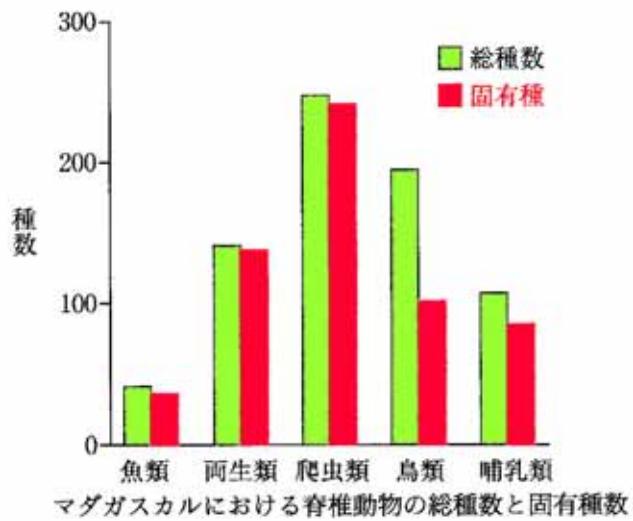
人間開発報告書2007/08による2005年時点での数値は、177か国について示されています(アフガニスタン、イラク、北朝鮮、ソマリア他については、計算できるだけの統計がありませんでした。)。

そのうち160位以下は次のとおりです。人間開発指数がほぼ同じでも、国によって、平均寿命が長い国、短い国、識字率が高い国、低い国、1人当たりGDPが高い国、低い国の違いがかなりあることがわかります。また、低位の国の多くが、植民地支配による撹乱(人種、宗教等の強調によって植民地住民を分断する支配、植民地管理境界を国境として独立せざるを得なかつた実態等)をひどく受けたアフリカの国であることもわかります。

HDI rank ^a	Human development index (HDI) value	Life expectancy at birth (years)	Adult literacy rate (% aged 15 and above)	Combined gross enrolment ratio for primary, secondary and tertiary education (%)		GDP per capita (PPP US\$)	Life expectancy index	Education index	GDP index
				2005	1995-2005 ^b				
160	Gulnea	0.456	54.8	29.5	45.1 ^e	2,316	0.497	0.347	0.524
161	Rwanda	0.452	45.2	64.9	50.9 ^e	1,206 ⁿ	0.337	0.602	0.416
162	Angola	0.446	41.7	67.4	25.6 ^{e,h}	2,335 ⁿ	0.279	0.535	0.526
163	Benin	0.437	55.4	34.7	50.7 ^e	1,141	0.506	0.400	0.406
164	Malawl	0.437	46.3	64.1	63.1 ^e	667	0.355	0.638	0.317
165	Zambia	0.434	40.5	68.0	60.5 ^e	1,023	0.259	0.655	0.388
166	Côte d'Ivoire	0.432	47.4	48.7	39.6 ^{e,h}	1,648	0.373	0.457	0.468
167	Burundi	0.413	48.5	59.3	37.9 ^e	699 ⁿ	0.391	0.522	0.325
168	Congo (Democratic Republic of the)	0.411	45.8	67.2	33.7 ^{e,h}	714 ⁿ	0.346	0.560	0.328
169	Ethiopia	0.406	51.8	35.9	42.1 ^e	1,055 ⁿ	0.446	0.380	0.393
170	Chad	0.388	50.4	25.7	37.5 ^e	1,427 ⁿ	0.423	0.296	0.444
171	Central African Republic	0.384	43.7	48.6	29.8 ^{e,h}	1,224 ⁿ	0.311	0.423	0.418
172	Mozambique	0.384	42.8	38.7	52.9	1,242 ⁿ	0.296	0.435	0.421
173	Mali	0.380	53.1	24.0	36.7	1,033	0.469	0.282	0.390
174	Niger	0.374	55.8	28.7	22.7	781 ⁿ	0.513	0.267	0.343
175	Gulnea-Blissau	0.374	45.8	.. ^j	36.7 ^{e,h}	827 ⁿ	0.347	0.421	0.353
176	Burkina Faso	0.370	51.4	23.6	29.3	1,213 ⁿ	0.440	0.255	0.417
177	Sierra Leone	0.336	41.8	34.8	44.6 ^b	806	0.280	0.381	0.348

資料2 マダガスカルという国

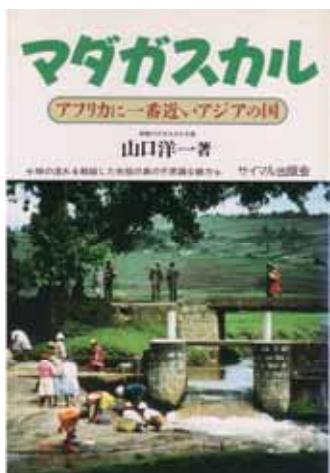
1. 古くから大陸から離れていたために固有種がとても多い国として有名



(出典: 山岸哲「マダガスカルの動物」)

2. 社会の基層も特異: 「アフリカに一番近いアジアの島」

- ・無人だったこの島に、2,000–1,000 年前にインドネシアから来た人たちが社会の基層。
- ・マダガスカル語はインドネシア語と同系統。
- ・アフリカで唯一、お米を主食とする。(アフリカでは、一般に、お米は慶事等の時に食べる贅沢な「野菜」。)





マダガスカルの小さな食堂の定食



タイで食べた夕食

3. マダガスカルの「開発」の状況

マダガスカルの人間開発指数は、2年前の報告では 0.5 を下回っていたものが、徐々に上昇してきています。

人間開発指数が同程度の他国に比べて、1人当たり GDP が小さいのが大きな特徴です。マダガスカルは、世界銀行の「世界開発報告書(World Development Report) 2007」において、

- ・「1日 1 ドル以下」で暮らす人の割合が 61.0%、
- ・これは、数値のある 94 開発途上国中下から 5 位

	Human development index (HDI) value	Life expectancy at birth (years)	Adult literacy rate (% aged 15 and above)	Combined gross enrolment ratio for primary, secondary and tertiary education (%)	GDP per capita (PPP US\$)	Life expectancy index	Education index	GDP index
HDI rank ^a	2005	2005	1995-2005 ^b	2005	2005			
143 Madagascar	0.533	58.4	70.7	59.7 ^c	923	0.557	0.670	0.371

4. 2007-2011 年の国家開発計画の数値目標

人間開発指数向上を第 1 の目標に掲げているのが、他国にない特徴です。神戸大学博士課程出身のイヴさんが中心になって作りました。

項目	2005 年	2012 年	項目	2005 年	2012 年
人間開発指数	146 位	100 位	経済成長率	4.6%	8-10%
貧困率	85.1 %	50 %	GDP	50 億ドル	120 億ドル
出生率	5.4	3-4	1 人当たり GDP	309 ドル	476 ドル
平均寿命	55.5 歳	58-61 歳	外国からの直接投資額	0.84 億ドル	5 億ドル
識字率	63%	80%	世界銀行ビジネス環境順位	131 位	80 位
中学卒業率	19%	56%	汚職指數	2.8	5.2
高校卒業率	7%	14%	土地登記率	10%	75%

資料3 田中さん講演会



田中さん講演会ポスター

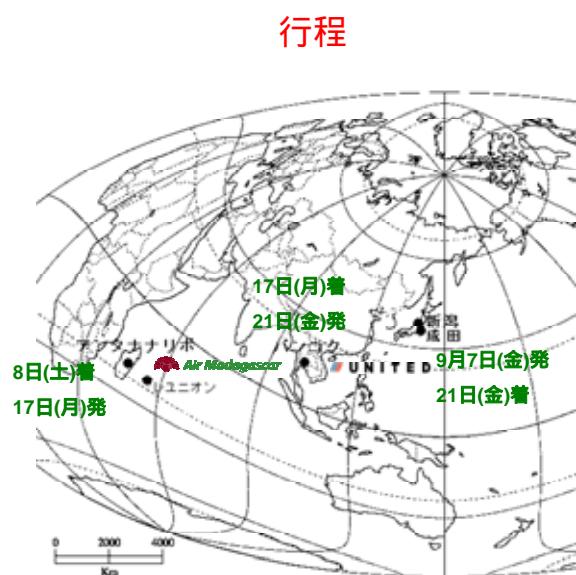


田中さん講演会の様子



田中さんのパワーポイントの内容

資料4 マダガスカル訪問行程図



資料5 マダガスカル訪問地図



資料 6 訪問・交流写真

成田を出て、アンタナナリボの町に着くまで

9月7日(金)

台風が関東地方に襲来したため、成田空港に到達できるかどうかが強く懸念されたものの、上越新幹線は平常運行され、予定通り成田空港に到着。



新幹線で上野到着



京成日暮里駅で成田空港行きを待つ。

ところが、バンコクに着いてみると、マダガスカル航空の機体に問題が生じ、マルセイユまで行って修理してくるとのことで、空港内のホテル券が乗り継ぎカウンターで用意される。



乗客全員にホテル券が渡るのを待つ。



ホテルの向かえの車を待つ。

9月8日(土)

乗り継ぎ客である我々はタイ入国の手続きをしていないが、そっとショッピングセンターに行ってみた。



マダガスカル航空がホテルで無料の昼食を用意してくれていたが、ショッピングセンターの大衆食堂で食べてみた。



18時間遅れで、19時に漸く搭乗の時間になる。アンタナナリボ着は24時を過ぎる。

9月9日(日)

ホテルで遅い昼食の後、まずは、日曜には13時で閉まるスーパーマーケット(南アフリカ資本)に行って飲み水等を購入。続いて、町に慣れるために、市場等まで散策。当初は、そういうことを土曜日にやって、日曜日はツインバザザ動植物園に行く予定だったが1週間後に延期。

夜は、アンドウリアマンジャトゥ元郵政・通信大臣御夫妻が、御自宅での夕食に招待下さる。同大臣のお父様(元国會議長)もいらっしゃっていて、夕食ばかりではなく、大臣のピアノ演奏、ピアノに遭わせた夫人の歌、そして元議長のピアノと、大歓迎を受ける。



ホテル・サカマンガの中庭で遅めの朝食



ホテルを出て町を歩き始める。



Place d'Independence から



日曜日で市場は休みだが、路上で野菜、果物等を売る人達が大勢いた。



建物内の店は閉まっていても、その遅い昼食を独立大通りに面した店で前の路上の店はにぎわっていた。



アンドウリアマンジャトゥ元郵政・通信大臣のお宅で。

各種機関・団体事務所に伺う(1)

日本大使館、JICAなど

9月10日(月)

まず日本大使館に行って、予定表等を提出。サカマンガの前で早朝に強盗があったとのこと。新潟大学出身の医務官に面会予定であったが、御不幸のために急遽帰国され、面会はかなわず。その後、保健学科の齋藤は、アンドウリアマンジャトゥ夫人の御助力により、公立病院の視察へ。

午後、JICA マダガスカル事務所訪問。所長が、マダガスカルの開発課題、ODA等について説明をして下さる。その後、齋藤は居残って、保健・医療関係の話を聞きする。



JICA 事務所の横から見た丘の町アンタナナリボ

外川所長自ら説明下さる。

各種機関・団体事務所に伺う(2)

NGO、大統領府等。また、アンタナナリボ大学を訪問。

9月11日(火)

自然林保護等と地域住民の生活向上を組み合せた活動を行っているマダガスカルの NGO 「FANAMBY」のラジャウベリーナ専務理事を訪問。3年連続でアンジュズルベのプロジェクトを 訪問していることに触れつつ、歓迎して下さる。叔父が駐日大使をしていたとのこと。今年からは、無農薬のバニラ、伝統米(赤米)等のフェア・トレードの活動を始めた。必要年数の実績を積んで認証を得る予定とのこと。そのバニラを頂く。他方、伝統米を購入。伝統米の箱には、売り上げを誰にどう配分するかがグラフで示されている。

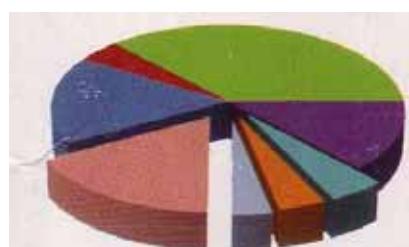
午後は、理学部(生物学・生態学)のラライナ・ラザフィアリン教授(元環境事務次官。国費留学生として一橋大学博士課程修了)を訪ねてアンタナナリボ大学へ。明治大学出身の環境経済学の先生他を紹介して下さるとともに、構内を案内して下さる。途中、今年入学したという唯一の日本人学生(農村開発専攻)と偶然に会う。

夕刻、イヴハシナ・ラザフィマヘハ大統領府国家開発計画事務局長(国費留学生として神戸大学博士課程を修了)を訪問。大変な多忙の中、親しく歓迎下さる。

齋藤は、午前中、サン・フランソワ診療所・産院(通称 Clinique des Seours)を訪問。午後、アンタナナリボ大学に同行の後、翌日の母子保健プロジェクト等の視察のためマハジャンガ(フランス名: マジュンガ)へ。



「FANAMBY」の売り出したアンジュズルベ産の赤米の箱。
1 箱 500 グラム入り。



Distributeurs	500 ar
Fonds de garantie Fanamby	130 ar
Emballage	1100 ar
Collecte et Conditionnement	400 ar
Association Féminine	144 ar
Prime* SAHANALA asso. des Producteurs	120 ar
Prime* SAHANALA aux Producteurs	100 ar
Prix sur le marché local	500 ar

その箱に印刷されている売り上げ配分のグラフ
(ar = アリアリ (マダガスカルの通貨。1,000 アリアリが約 70 円))



アンタナナリボ大学理学部で
ライナ・ラザフィアリスン教授他と



アンタナナリボ大学理学部の中庭



アンタナナリボ大学構内的一部



経済学部前



アンタナナリボ大学の前の食べ物屋を中心とした店舗。学内の食堂の価格が学生にとっては高いため、学生の多くはこういった店で食事をとのこと。



同じくアンタナナリボ大学の前の近距離のミニバス



アンタナナリボ大学前入り口で



イヴハシナ・ラザフィマヘハ大統領府開発5か年計画事務局長と。
なお、同事務局長は、10月27日に経済・貿易・産業大臣に就任。
新閣僚についての大統領府の発表(大統領府ウェブサイト):
<http://www.madagascar-presidency.gov.mg/index.php/view/news/item/793>

マダガスカル政府機関訪問(3) そして、マダガスカルの学生達との意見交換会

9月12日(水)

午前中、国立公園等の管理を行う特殊法人・マダガスカル自然保護区管理協会(ANGAP)を訪問。事業部長が急遽南アフリカ出張となつたため、ティアナ・アンドゥリアマンガ情報課長他がお会い下さる。

午後、国連開発計画、国連広報センター及び環境庁の協力の下にマダガスカル・ガールスカウト連盟が準備をして下さったガールスカウトのメンバーを中心とした学生達(男子学生を含む。)との意見交換会。日本からの学生々が、出身地の紹介、日本社会の直面している環境問題、対外依存、通勤混雑、食の安全等について論じ、これに対して多数の質問が出た。また、その後2晩続けてホテルに来て、学生達の部屋で飲み交わしながら話し込んだ男子学生もいた。



タクシーで ANGAP へ。市内の移動はいつもタクシー。タクシーは料金交渉が必要。外国人の多いホテルの前のタクシーは高めに言う。他の場所のタクシーは、初めから妥当な値段を言うことが多い。一般物価に比べるとガソリン価格の高いマダガスカルのタクシー運転手は、極端な省エネ運転。一時停止でのエンジン停止は当たり前。下り坂でもエンジンを切る。軽量化のため、ガソリンは少量しか入れない。走り出すとまず給油することがしばしば。しかし、目的地に着くに十分なだけしか入れないので、あっと言う間に給油終了。



ANGAP で。手にしているのは、国立公園の入園料収入の半分を地元の小規模開発に配分する方法が先進的であるとして愛知万博の際に受賞した「愛・地球賞」の賞状。



学生等との意見交換会



最後まで後片付けをやっていたマダガスカルの学生たちと会場前で。

意見交換会で日本の学生達が用意したパワーポイント

A variety of Japan	Our homelands AT prefecture Location near Korea, China	"KAMAKURA" Festival KAMAKURA means many houses or small town. - place for children and teenagers. - attractive for adults.	MATTERS IN JAPAN	Maki 	Niigata prefecture 
Akita prefecture 	My Hometown... YOKOTE in August - long way from the capital of Japan. - very cold. - nice Rabbit.	Environmental Destruction - a stream for rice fields. - When I visit a village, many streams feed there.	Animals in the stream 	Niigata city 	
My Hometown... YOKOTE in winter - covered with snow. - Snow and snow. - Anything snow.	There are no animals - the river often dries up in summer. - nut, garbage, and trash.				

(注) マダガスカル語で「saka」はネコ、
「maki」はキツネザルを意味する。



地球環境ファシリティーの資金で NGO の 実施するプロジェクトを訪問

9月13日(木)

国連開発計画(UNDP)と FANAMBY の御協力により、地球環境ファシリティー(Global Environment Facility: GEF。世界銀行、UNDP、国連環境計画(UNEP)が共同で管理して、開発途上国が地球的な環境課題に取り組むのを支援するための資金供与の仕組み)の資金から UNDP 担当で運営されている小規模資金協力として FANANBY が実施しているアンジュズルベの残存自然林の保護区化と隣接農家の収入増加策を組み合せたプロジェクトを日帰りで訪問。アンジュズルベの町から先は、四輪駆動車でないと走れない悪路。



アンジュズルベに向かう途中の一般的な風景



農村部では薪、都市では炭が燃料であるマダガスカルでは、このように切り株を残して伐り、そこから再び木が伸びて10年以上すると伐れるようになる(萌芽更新)のが一般的。残存自然林を除くと、ほとんどの林がそうなっている。日本でも広く行われていた薪炭林の維持のやり方。炭は、農村の人たちにとって重要な現金収入。



薪炭林の内部。切り株からの萌芽更新がよくわかる。



一派的な川での洗濯。川は濁っているが。)



道路の狭いマダガスカルのバス



途中の集落で売っていたウナギの干物。



大きくおいしそうに成長したキャベツが途中で見られた。水分保持のために穴の中で野菜を栽培する方法があちこちで見られる。



地元の食堂での一般的な食事



マダガスカルでは小さな食堂をホテリと呼ぶ。



FANAMBY のプロジェクト事務所の前で



残存自然林保護プロジェクトに接する農家では、訪れる度に、新しい作物、特に換金作物になり得るもの栽培を拡大させている。最初の年に案内して下さったこの農家の話を聞いた。手前はタピオカ。向こうに見える池も、まだ昨年から魚(ティラピア)の養殖を始めたものとのこと。インゲンの栽培等は、Fanamby のプロジェクトの一環として始めたが、魚の養殖を含め、他の工夫の多くは、独自に始めたものとのこと。インゲン、魚等は、アンジュズルベの町に行って、店や仲買人に卸すのではなく、自分で売っているとのこと。プロジェクトで始めたインゲンの栽培結果自体は良好とのことだが、出来高が気象条件等に大きく左右されることと、出来高が少ないことが課題と思うとのこと。



新たにパッションフルーツも植えられていた。その花。



パッションフルーツの実。



プロジェクトの一環のキャンプ地の施設整備がさらに進んでいた。農家では、従来、こちらから流れてくる小川の水を飲用にしていたが、人が入るようになり、汚染の心配があるため、前記の養魚池のほうを水源に変更したとのこと。



この残存自然林は、昨年、保護区に仮指定され、現在、本指定に向けて管理計画作りの作業が行われているとのこと。仮指定とともに養成された地元の人によるガイドにより残存自然林の中を歩いた。



残存自然林とそれに接する農地。学生が農家の御主人に、生まれた頃と今とのこの付近の風景の違いを訪ねたところ、かつてはこれらの谷間は湿地であったが、自分が水田として開拓したことが大きく異なり、しかし、その周辺の自然林や、森林が無くなっている風景はほとんど変わっていないとのこと。農業をやりたいと考えているこの学生が、農家の心構えについて更に訪ねたところ、「常に働き続けること。そうすることで初めて食べていくことができる。」との答えだった。家族数も増える中で、農地の拡大と作付けの工夫等の努力を重ねて初めて生活していくけるというマダガスカルの農家の実態を反映していると思われた。



一昨年案内をして下さった農家の御主人



農家。

村に青年海外協力隊員を訪ねる

9月14日(金)

JICAの御協力により、アンタナナリボから車で1時間行き、更に悪路を30分ほど行ったところにあるごく小さな村アンブヒチャンガヌの小学校に派遣されている青年海外協力隊員を訪問。

そのまま、夕刻には、アンダシベの国立公園のすぐ外にある宿へ。



途中の風景



小学校の校舎(左)とトイレ。トイレは傷んでいる。また、生徒はほとんど使わないとのこと。



傷んだままのトイレの扉





電気もない村である上、窓も大きくなないので、暗い教室(この写真は明るく仕上げました。)。教室数が足りないので、2学年一緒に授業。急に地域の先生方の会議が入ったため、この日学校は臨時休校。



環境教育のためのポスター。



教室で、協力隊員から説明して頂く。



雨漏りのために天井がかなり傷んでいる。



生徒の家族によるボランティアの教室補修



学校の運営費がないので、協力隊員の音頭取りで、村の有志が、首都で売るための野菜を栽培。初代隊員がアスパラガスで始めた野菜の種類は、2代目隊員となり、かなり広がっていた。そのようなニンニクの植え付けに精を出している農家の方にお話を伺う。しかし、首都まで売りに行く交通費が工面できないため、これまでのところ隊員がホテル等に売りに行っている。



2年前の訪問時には右のようにきれいだった隊員のトイレは、屋根も崩れ落ち、壁もかなり崩れきっていて、見る影もなかった。雨期にはどうしているのだろうか。隊員個人は非常に明るく、元気だが、住まいも天井が低く、テントのような状態。住まいの条件は悪い。



ちょうど隊員の住まいの水がなくなっていたので、みんなで水汲み体験をした。水源から溝が掘られて、集落に比較的近いここまで水があり、片手に荷物、もう片方の腕で子供を引かれている。水は少し濁っている。村の人達はそれをそのまま飲んでいます。まだ片手でバケツを支えながら歩く。





首の後ろにこぶのある、マダガスカルで一般的なゼブ牛とそれ違う。

この村の人達は畑作に熱心に取り組んでいる。段々畑を作り、更に段のそれぞれに溝と水を貯める穴を掘って、少ない降水量に対処している。この畑作りは、他の集落に比べてかなり熱心。



自給自足型の村で隊員が自炊することは難しく、初代隊員に引き続き、集落内のあるお宅で食事をさせて頂いている。我々も、昼食用に持参のサンドイッチに加えて、その家の方のご飯と野菜スープ、タロイモ等と一緒に戸外で頂いた。



村の方から頂いた昼食。たくさんのご飯(伝統の赤米)、タロイモ、野菜のスープ。隊員によれば、野菜のスープにたくさんの豆が入っている点、いつもよりも豪華とのこと。

重要な外貨収入をもたらし、また、入園料の半額を地元の小規模開発プロジェクトに配分している国立公園を訪問

9月15日(土)

午前中、アンダシベ・マンタディア国立公園のインドリ保護区を訪問。国立公園ではガイドをつけることが義務づけられており、我々には英語のガイドさんがついた。昼食後、アンタナナリボに戻る。その途中、ムラマンガの町に立ち寄った。

アンタナナリボに戻ると、予約してあったホテル・サカマンガの建物の一部が壊れたとして、すぐ近くの長期滞在者用の宿が用意されていた。クレジット・カードが使えない施設で、しかも週末で換金もできないのであわてたが、サカマンガがクレジット・カードで受け取り、それを実際の宿が受け取ることで決着。しかし、とても広い部屋になった。



シロアリの塚



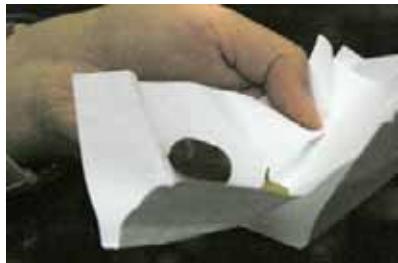
ガイドさんはしばしばフランス語読みで単語を言うので、フランス語を全く知らないとわかりにくいくらいかもしれない。



最大のキツネザルであるインドリ



インドリを見上げる。



落ちてきたインドリの糞



国立公園の外を含め、様々なカメレオングが見られる。



ムラマンガでは、市場の生地屋が集まっているところに立ち寄った。



マダガスカルの地方都市に多い人力車(「プスプス」と呼ばれる。)

青年海外協力隊員の皆さんと昼食 その後、ツインバザザ動植物園訪問

9月16日(日)

アンタナナリボ付近の青年海外協力隊員のみなさんと、ホテル・サカマンガの中庭でピュッフェ昼食を取りながら懇談。たまたま歯の治療に地方から来られていた隊員及び村の人達に代わって首都に野菜を売りに来た一昨日の村の隊員も来て下さり、計5名の方とお話できた。JICA事務所から帰る時にちょうどタクシーから降りて来られた、やはり地方の隊員、また、日本人経営の旅行会社で会った方を含めると、今回は計7名もの隊員とお話できた。





ツインバザザ動植物園入口付近の賑わい



ワオキツネザル

7:45 の飛行機に乗り、バンコクに夜到着

9月17日(月)

宿を 5:15 に出て、7:45 の飛行機でバンコクへ。バンコクのホテル到着は午前 1 時近くになつた。



離陸した後、東に向かう。



海岸からマダガスカルを離れる。



おそらくは給油を第一の目的として、フランス領レユニオンに立ち寄り。

FAO アジア・太平洋地域事務所訪問

9月18日(火)

FAO アジア・太平洋地域事務所訪問。次長を含め 3 人の方々が時間をとって、国際機関や国際機関で働くことの意義や心構え、現場経験の重要性なども話して下さった。



FAO 訪問



FAO の隣の、川べりのレストランで昼食



昼食の後、チャオプラヤ川の定期船に乗る予定だったが、海軍のお祭りの練習のために川が閉鎖され、定期船は運休していた。そこで、近くのタマサート大学に行ってみた。



タマサート大学の学生食堂



ショッピングセンターの大衆食堂と同じく、小さな店がたくさんあって、そこから好きなものを買って食べる。



タイボクシング部。外国人学生ばかりなので、タイ人学生はいないのかと聞くと、いるとのこと。この時は、タイ人学生は1人(女性)しかいなかったが。広島大学の相撲部員がほとんど留学生というのに似ている。日本人学生も5人入っていて、うち4人が女子学生とのこと。



数年前にできた高架式鉄道(スカイトレイン)。1997年の経済危機もあって、道路の深刻な渋滞が一時緩和したが、再び、渋滞は深刻になっていた。タマサート大学からの帰りも、我々のホテルの方向の渋滞を嫌うタクシーの運転手たちから次々と乗車拒否に遭い、ホテルにはバスを乗り継いで戻る結果になった。



夜の屋台



タイの知人と夕食

国連環境計画(UNEP)アジア・太平洋地域事務所訪問

9月19日(水)

バンコク国連ビル内にある国連環境計画アジア・太平洋地域事務所訪問。次長が対応下さる。併せて、国連ビル内のカフェテリアで昼食をとって国連の雰囲気を味わい、売店でお土産を買い、更に、別にある国連グッズのお店でも買い物。ここで、岡山大学医学部保健学科の先生と学生達と出会う。その後、スコールのためにすぐに外に出られず、暫く国連ビルで待機。

雨が上がったので、国連ビル前からエアコンバスでチャオプラヤ川へ。川の手前のバス停で降りる予定が、言葉の問題のため、川の向こう側のバス停まで行ってしまう。しかし、そちらにも桟橋があったので、実態上の問題は無し。上流のノンタブリまで行き、折り返してタクシン橋の「スカイトレイン」の駅のところまで行く。ノンタブリで、学生1人が乗り損なったが、次の船に乗って来て合流。その学生を待っている間に別のタイの知人から一緒に夕食をとろうという電

話があったので(人の多い場所でのテロがあるので、情報収集等のために空港で借り、空港で返す携帯電話を借りていた。)、伊勢丹のところで待ち合わせ。彼が大渋滞のために 5 キロ先から 2 時間かけて到着するまでの間、伊勢丹でたっぷり買い物。



国連ビルのカフェテリアで、UNEPの次長と昼食



国連ビルの中庭



国連ビルのゴミの分別収集



国連ビル内で見かけた職員ポストの空席公告。今回、専門機関の空席公告が多かった。



チャオプラヤ川の手前で降り損ない、川を渡ったところでバスを降りた時



チャオプラヤ川の定期船から



ノンタブリの町には人力車もある。人力車引きの多くは若くない。



「タイスキヤキ」の夕食。タイ人の知人の来ている黄色いボロシャツは、2006 年に国王が在位 60 周年を迎えたことを祝う気持を表すためにタイ人の多くが着ているもの。公の場でも通用するので楽。

古都アユタヤ見学

9月20日(木)

学生だけで、タイの第 2 王朝の都だったアユタヤにワゴン車バスで往復。体調の悪い引率者は豪華病院に行き、食あたりだと言われる。



アユタヤの遺跡



森林伐採禁止等のために大量失業したゾウたちがアユタヤで観光客を乗せていた。



1990年にミャンマーの国有林を見学した際の集材作業の実演。アユタヤのゾウたちも同様の作業に従事していたことだろう。



海外のお金持ち治療に来る豪華病院



夜になっても渋滞するバンコクの通り

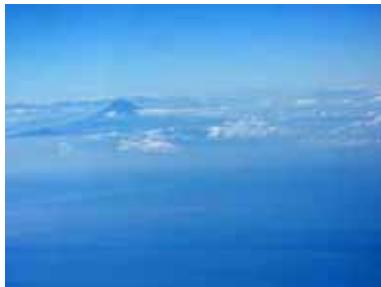


渋滞のためにタクシーが乗車拒否するので、今夜もバスでホテルに帰る。

バンコクを出て成田に到着

9月21日(金)

午前6:50の飛行機でバンコクを出て、15時に成田到着。解散。バンコクでは、午前4:15にホテルを出たのにかかわらず、荷物検査、出国審査等のために、みやげ物を買う時間がなかった。



富士山が見えた。



房総半島の南を回って犬吠埼の上で左旋回して北西に進み、折り返して南東向きに着陸。

資料 7 報告会

1. 報告会ポスター



学生向け報告会ポスター



市民向け報告会ポスター

2. 報告會資料

10月の学生向け報告会と12月の市民向け報告会では、ほぼ同じものを使用しました。

坂牧光恵(新潟大学農学部2年)



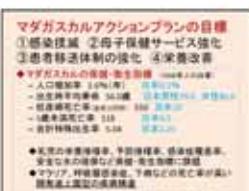
高橋寿明(新潟大学工学部 4 年)



高橋拓也(新潟大学経済学部4年)

<p>ビジネスは貧困問題を解決できるか</p> <p>発表者：経済学部 経営学科 高橋拓也</p>	<p>統計から見る貧困問題</p> <p>• UNDPの「Human Development Index」は、「人間が人生を豊富にするための基本指標」の満たされ具合を評価する指標。 一人当たりのGDP、識字率、平均寿命などから算出される。</p> <p>一人当たりのGDPは経済力を、識字率は教育力を、平均寿命は人々が健康に暮らせているかどうかを示している。</p>	<p>列車がいつ来るのか、誰にもわからない。</p> <p>訪問した学校の正式な教員は校長先生だけ。</p>																									
<p>経済成長は幸せをもたらす？</p> <p>Human Development Index (HDI) を参考に</p> <table border="1" data-bbox="203 496 450 631"> <thead> <tr> <th>国</th> <th>GDP per capita</th> <th>識字率</th> <th>平均寿命</th> <th>一人当たりのGDP</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>日本</td> <td>39,435</td> <td>100%</td> <td>82.9歳</td> <td>31,342</td> </tr> <tr> <td>中国</td> <td>8,795</td> <td>83.8%</td> <td>71.8歳</td> <td>3,004</td> </tr> <tr> <td>マダガスカル</td> <td>3,751</td> <td>91.7%</td> <td>73.3歳</td> <td>3,778</td> </tr> <tr> <td>マダガスカル (HDI)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>マダガスカルで見た貧困問題 農村部はインフラが整備されていないため、医療サービスを容易に受けられない。</p>	国	GDP per capita	識字率	平均寿命	一人当たりのGDP	日本	39,435	100%	82.9歳	31,342	中国	8,795	83.8%	71.8歳	3,004	マダガスカル	3,751	91.7%	73.3歳	3,778	マダガスカル (HDI)					<p>貧困問題は1基1\$以下の生活？？</p> <p>「1日1基1\$以下の生活」とは、本当に必要な物を購入しようとすると、儲けのない状態を正直に表現していない。</p> <p>マダガスカルの1基1\$以下の生活は？ $1\text{基} = 120 \times 120 = 14400\text{mm}^2$ 1基あたり1人月を800mAで消費している場合だと、14400mA相当の電気。</p> <p>貧困層は、「お金が無い」というだけではなく、「お金があるのに、なぜお金が無いのか？」にこそ、問題が潜んでいます。</p>	<p>マダガスカルで見た貧困問題</p> <p>・インフラが整備されていないため、医療サービスを容易に受けられない ・教育の斬り落とし 人々は生活向上のために、不断の努力をしている！</p> <p>不断の努力が不十分なため、それぞれの個人が努力を怠るとして、生活向上できないことが、「貧困」問題。</p> <p>ビジネスは経済成長だけしかもらさない？</p> <p>…これまでの企業であれば、経済成長を促すことしか貢献は出来なかった。けど…</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CSR: 企業の社会的責任・概念の浸透 ・社会企業の増加 <p>お金よりも大切なことに企業が気づいた。</p>
国	GDP per capita	識字率	平均寿命	一人当たりのGDP																							
日本	39,435	100%	82.9歳	31,342																							
中国	8,795	83.8%	71.8歳	3,004																							
マダガスカル	3,751	91.7%	73.3歳	3,778																							
マダガスカル (HDI)																											
<p>CSR活動の例</p> <p>Volvo: 未来社会をつくる Volvoの「1% 10年」</p> <p>1%の利益に相当する、CSR活動を実施する プロジェクトの実績などを紹介しています。</p>	<p>CSR活動の例</p> <p>Volvoの「1% 10年」</p> <p>1%の利益に相当する、CSR活動を実施する プロジェクトの実績などを紹介しています。</p>																										
<p>本当に相手国そのためのCSRを目指す</p> <p>…だが、CSRといつても何をすべきか、混乱している企業も多い。選択肢が必要。</p> <p>選択肢例えば国際的にNGOなど、パートナーなど、資金を提供する方からの入る道筋を定められるのは、その後次を知り店舗へたる要請者自身、Fax: 慶應義大リバティ</p> <p>発表者、パートナー、政府、企業、団体者みんなでとことん探出し、長期的に取り組む。</p>	<p>ビジネスは貧困問題を解決できるか</p> <p>企業単独では解決不可能。解決というよりも、お手伝いできるといふのが正しい。新たに何か事業を興すよりも、現地の人々が既に行っている事業の弱い部分をお手伝いするほうが、現実的だし効果的。</p> <p>政府・NGO・現地スタッフとの協力が不可欠。四方それぞれの悩み・悩み・迷い・プライバシーの合い、互いに協力的関係を築いていくべき。</p>																										

齋藤君枝(新潟大学医学部保健学科准教授)



武内貴之(中央大学文学部4年)

(ビデオ「スタディーツアー イン マダガスカル」(約25分)による報告)

以下は、そのビデオ画面の一部を静止画にしたものです。

報告会で使ったものに多少の解説を加えたものをYoutubeにも掲載しています。

<http://jp.youtube.com/>から、「マダガスカル」「開発」で検索すると、このビデオが出てきます。

(2008年2月初め現在、「マダガスカル」「開発」での検索では、このビデオだけが出てきます。)

なお、解像度を大幅に低くしてもなおファイルが大きいので、5分割してあります。



資料8 國際開発研究会ウェブサイト

「アジアの国マダガスカル訪問・交流事業報告」トップページ
(<http://kokusaikaihatsuken.net/mada2007.aspx>)

The screenshot shows the homepage of the International Development Research Institute (IDRI). The header features the text '国際開発研究会' (International Development Research Institute) and the tagline '「百聞プラス一見」の力を追求しています。' (We pursue the power of 'hearing a hundred times plus seeing once'). The left sidebar contains a navigation menu with categories like 'ようこそ' (Welcome), '会の紹介' (Introduction), '「開発」とは何か' (What is Development?), '事業' (Business), 'マダガスカル訪問・交流事業' (Madagascar Visit Exchange Program), 'マダガスカル', '開発途上国マダガスカル', '農家の努力', '村人の努力', 'ビデオ第1作', '交流会', '首都の暮らし', '地方の暮らし', '食事', '政府機関', 'アンタナナリボ大学', 'FANAMBY', 'JICAと青年海外協力隊', '国立公園', '得たもの', '報告書', '新聞への投稿', 'JICAへの報告', 'マダガスカル情報', 'バンコク', 'アユタヤ', '行事Events', '会員へのお知らせ', 'Links', and 'サイトマップ'. The main content area discusses the 2007 Madagascar Visit Exchange Program, mentioning the reasons for choosing Madagascar, its impact on Africa, and its relationship to Asia. It also highlights the 2005 movie 'Madagascar' and its influence on Japanese public opinion. The page concludes with a note about the implementation of the program through JICA and other partners.

資料9 JICA ウェブサイトでの報告

http://www.jica.go.jp/hiroba/topics/2007/071017_02.html

JICA地球ひろばトピックス マダガスカル訪問で、「百聞プラスー…

http://www.jica.go.jp/hiroba/topics/2007/071017_02.html

JICA地球ひろば

[JICA地球ひろば](#) > [トピックス](#) > [2007年](#) > マダガスカル訪問で、「百聞プラスー見」の力をつける

マダガスカル訪問で、「百聞プラスー見」の力をつける

2007年10月17日

9月7-21日、「開発とは何か」について勉強会をやったり授業をとったりしていた学生等のグループ「国際開発研究会」のうちの5人が、(財)三菱銀行国際財団の助成を頂いて、マダガスカルを訪問し、私も会の顧問として同行しました。

訪問の意図したところは、勉強会や授業で学んだことに加えて現地を見ることによって、開発途上国の開発問題について具体的かつより現実的に考える力をつけよう(「百聞プラスー見」の力)ということです。また、国際協力政策学の枠組みの中のことなので、政府機関、NGO、援助機関、そして具体的なプロジェクト等まで、幅広く訪問しました。現地の学生たちとの意見交換会も大変有意義でした。

そのうちJICAに協力をお願いしたのは、マダガスカルの開発課題や日本からのODAについての説明と、村の小学校に派遣されている青年海外協力隊員の訪問でした。加えて、我々がマダガスカルを離れる前日の日曜のビュッフェ昼食と一緒にとれる方があればとお話をしたところ、5人の隊員が来て下さいました。



最後の昼食に5人の協力隊員が来て下さった

マダガスカルは、2002年の大統領選ではほぼ同数の票を得た2人の当選を巡って政治的混乱が生じましたが、昨年暮れに現職が圧倒的多数を得たことで、政治的安定度が増しました。そういう背景の下に作成された今後5年間の国家開発計画は、その目標の第一を、個人が自分たちの生活を良くする力を表現している「人間開発指數(Human Development Index)」の向上に置いていること、平均余命、識字率、中学卒業率を大幅に引き上げること等を目標の上位に置いていること、他方、多くの国の開発計画で第一の目標に掲げられることの多い国内総生産と1人当たりの国民所得の向上が第9~10位と、下位の目標になっていることが特徴的です。つまり、お金で示されるようなことの向上にも努力するけれども、健康や教育のような、国民一人一人が自分たちの生活を良くする力をつけることのほうを重視した目標設定になっています。

JICAの技術協力を中心とする日本のマダガスカルに対するODAは、これまででも、保健と教育に重点を置いてきましたが、マダガスカルのそういう目標設定や政治的安定を受けて、日本は同国に対するODAを更に拡充させて行こうとしていることがよくわかりました。

他方、青年海外協力隊員については、計7人の隊員のお話を聞くことができました。その結果、隊員の活動、特にその初期には、それぞれの専門の仕事をするための基礎を作ることに相当な時間と労力を割かなければならぬことが、開発途上国では必要であることがよく理解できたと思います。



村の小学校に派遣されている協力隊員から教室で話を伺う

例えば、私たちが訪問した村の小学校の隊員の場合、初代の隊員は「体育活動」のために派遣されたのですが、小学校には、校舎はあっても運営費がなく、サッカーボール一つを買うことも困難でした。そこで、彼は、JICA専門家に相談した結果、首都の外国人が高く買うアスパラガスを村の有志に栽培してもらい、それを売って学校の運営費を作ることに力を注ぎました。今回お会いした2代目の隊員は、それを更に発展させ、作ってもらう野菜の種類を増やすとともに、販路も拡大させていました。それでもなお、村の人たちには、野菜を首都まで売りに行く交通費が出せないので、彼女が、野菜を頭の上と両手に持つて長い悪路を歩いて国道まで行き、そこからバスに乗って首都に売りに行っているのです。初代隊員が着任



して以来、かなりの進展ですが、それでもなお、村の人たち自身が野菜を売れるようになるという、難しい課題が残っているのです。 村の有志がアスパラガスで始めた野菜作りが、ラディッシュを含め、何種類かに拡大していた

別の村で保健・衛生活動をやっている隊員の場合は、かつてODAで供与された井戸のポンプが壊れてしまい、安全な水の確保という重要な基礎が脅かされました。しかし、ポンプの部品は近くの町でも手に入らず、彼女は、そのためにあちこちに掛け合など、ポンプの修理に多大の時間と労力をかけることになっています。



協力隊員も、村の人と同じに、水場まで少し濁った水を汲みに行く

マダガスカルの1人当たりGNI(国民総所得)は290ドルと、「世界開発報告書2007」掲載135か国中下から10番目です。しかし、訪問した隊員の村では、皆さん、段々畑の各段に溝や池を掘って水分条件の改善に努力し、色々な作物栽培を試していました。別の村でも、湿地だった谷間を水田にする開墾、近くの街で売れる野菜や果物の栽培、堆肥作り、養魚、国際機関のプロジェクトへの参加等、色々な努力をされていました。そして、どの方も、表情は明るく、充実感がありました。「1日1ドル以下の生活」といった金銭面の数値と現地の人々の生活の実態とのギャップが大きい。しかし、そういった金銭的な数字に現れないような問題がたくさんあることも事実であった。」という感想を学生が述べていました。マダガスカルの人たちは、自分たちの生活を良くする努力をしているし、また、政治的安定とともに政府も人々が自分たちの生活を良くする力をつけることに重点を置こうとしています。しかし、現実には、保健・医療・衛生面、教育予算・人材、インフラ等、多数の課題があります。JICAや青年海外協力隊の皆さんのが努力が更に良い結果をもたらすよう、訪問させて頂いた者一同、願っています。

報告者 宮田春夫(新潟大学国際センター)

関連リンク

- [訪問写真](#)

Copyright © 2006 Japan International Cooperation Agency. All Rights Reserved.

JICA地球ひろば
〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-2-24
電話番号: 03-3400-7717(代表) ファックス: 03-3400-7394



資料 10 リーフレット



表



資料 11 JICA タウンミーティング展示概要

会場風景



資料 12 新潟日報の記事

2007年10月16日 新潟日報



テキストは次のとおりです。

開発途上国との交流を通して、国際協力の在り方を考える新潟大学生らのグループ「国際開発研究会」のメンバーら六人が九月、アフリカ東部の島国マダガスカルを訪問した。現地の暮らしや教育事情などについて、代表の同大経済学部四年高橋拓也さんに寄稿してもらった。

マダガスカルは、サルのアイアイ、大きなバオバブの木などで知られる自然豊かな国で、訪れる日本人も増えている。一方、国民の六割以上が一日一ドル以下で生活し、「貧困国」といわれる。二週間の滞在期間中、国際協力機構(JICA)事務所、政府系機関、非政府組織(NGO)やプロジェクトを訪問した。

日本の青年海外協力隊員一人が派遣されている村が、最も印象に残る。貧困を想像していた僕が見たのは平和な農村風景で、飢餓や栄養失調で村民が日々死んでいくということは全くなかった。

マダガスカルは稻作が盛んで、世界でも有数の米消費国だ。訪れた村ではふかしたタロイモ、野菜のスープ、ご飯というフルコースを振る舞ってくれた。その食事内容からは一見、彼らが幸福そうに見えた。

しかし、広い意味での社会資本整備に目を移せば問題が見えてくる。小学校には十分な教材も、サッカーボールを買うお金もなく、校舎は雨漏りしたまま。正式な教員は校長しか配置できていない。農村には電気はおろか井戸もなく、汚れた水を飲んでいるのが普通。医療体制は整わず、離れた町の医者に行こうにも道路がない状況だ。

同国全体でみると、出生児千人のうち百二十三人が五歳未満で死亡(日本は四人)し、十万余件の出産があれば五百五十件で母親が死亡(同十件)している。

教育や医療が不十分なため、自分の能力を発揮して生活向上できないことこそが、実際に見えてきた「貧困」だった。「一日一ドル以下の生活」のイメージと現実との大きな差、現場に行って初めて分かることが無数にある。僕はこれからも、何らかの形で途上国とかかわっていくだろう。